

保育所・幼稚園実習による保育専攻学生の育ち（Ⅴ）

—実習状況を踏まえた実習指導の改善に向けて—

○廣瀬則子 三木知子 戸江茂博
(頤栄短期大学) (頤栄短期大学) (頤栄短期大学)

【問題と目的】

保育職就業を目指す保育専攻学生の育ちにおよぼす保育所、幼稚園実習の多大な影響については、保育者養成に携わる何れの者も明確に認識していることである。我々はこれまで、様々な制約のある中で、“何れの学生にとっても、できる限り実り多い実習を！”を基準に置き、実習指導の充実、改善に努めてきた。また、その試み、効果の一端を発表してきた。これまでの発表として、実習園評価と学生の自己評価を記したリーダー・チャートの実習後個別面談時における活用効果について（廣瀬他：1998、2000）、2年間を通し、実習指導と進路相談、指導を融合、連携させる援助的介入の必要性について（三木他：2000、戸江他：2002）、実習後の個別面談に加え、学生の集団討議による“気づきの共有”の必要性について（坂根：2001）を挙げるができる。

これまで我々は、主に保育専攻学生が保育者の専門性獲得、保育職就業へ向けての学習、意欲の向上に実習経験を生かすための援助的介入に焦点をあて検討してきたが、実習園における個々の学生の実習状況による影響については取り上げてこなかった。例えば、戸江他（2002）では、保育職就業が例願期に進行しなかったと思われる学生を事例として取り上げ、2年間の保育・保育職に関する意識の変化について検討し、対人関係の形成に問題が潜んでいることを明らかにした。特に、実習園の担当保育者との人間関係のあり様が、保育職就業意欲、保育者の専門性獲得に影響をもたらすことを指摘したが、如何なる内容、状況下で実習を行ったかについては言及しなかった。実習内容、状況は学生の育ちに大いに関連することが容易に推測され、詳細な検討が必要と考え、この問題を本稿で取り上げることにした。

しかし、保育所、幼稚園における実習状況は非常に複雑である。学生は、公、私立の多くの園に分散し実習するため、大きい実習経験内容の違いが生じてくる。また、発達途上の学生を実習に送り出すため、養成校の要望を実習園へ明確に提示できない事情も養成校は抱えている。そこで、今後改善すべき実習指導のあり方について示唆を得るため、まず保育所、幼稚園実習

の実習形態について実情を捉え分析し、問題点、課題を明らかにすることを目的とし、検討することとした。

【方法】

- (1) 対象者：S短期大学保育科学生 141名。
- (2) 用いた資料：各学生が経験した実習について、実習状況、実習中の学び、気づきなどについて記述させた実習レポート。各実習後の事後指導の時間に配布し、後日回収。実施時期は、保育所実習Ⅱ（保実Ⅱ、連続2週間）後の2001年6月、および幼稚園実習（幼実、連続3週間）後の2001年10月。

【結果及び考察】

保実Ⅱ後、幼実後の実習レポートに基づき、実習状況を示したのが表1、表2である。表中の数字は、実習形態（全日実習と半日実習、部分実習、参加実習、観察実習）、実習日数別に体験者数を示したものである。なお、全日、半日の実習日数が1、2、3日については日数内訳を（ ）内に示した。図1、図2は、保実Ⅱ、幼実における部分実習の実習内容を分類し、その体験件数を示したものである。

表1、2の平均日数をみると、保実Ⅱ、幼実の両実習ともに部分実習が一番多く、次に参加実習であり、全日と半日実習は、保実Ⅱでは2.3日、幼実では1.9日となっている。両実習ともに部分実習と参加実習が多く、両実習に同様の傾向がみられる。実習形態、実習日数別にみると、学生によっては実習状況の違いがかなりあることがわかる。全日、半日実習を経験していない者が保実Ⅱでは20名、幼実においては29名いる。保実Ⅱの20名のうち部分実習が5日以下の者が11名、幼実29名のうち部分実習7日以下の者が15名おり、実習期間中、半分の日数が参加実習であり、日案を立てない状況にあると言える。これに対し、保実Ⅱにおいて全日、半日実習を5日以上経験し、参加実習が0日の者が5名、幼実において全日、半日実習を5日以上経験し、参加実習が2日以下の者が6名である。また、保実Ⅱと幼実の両実習あわせて、全日、半日実習を1日も経験していない学生が6名、これに対し9日以上全日、半日実習を経験している者が10人いる。以上の結果は、学生間に体験内容の格差が生じていることを示すものと思われる。

次に図1、2より部分実習の体験内容について検討してみる。保実Ⅱおよび幼実における部分実習の体験総数は各々976件、1158件であった。保実Ⅱでは絵本読みおよび手遊びが群を抜いて多く、絵本読みは体験総数の34.7%を占め、手遊びと合わせると全体の60.1%になる。幼実でも絵本読みと手遊びが1位、2位を占め、合わせて全体の33.8%であるが、降園活動と朝の集いがこれに続き、保実Ⅱとの違いがみられる。また、ピアノ実技に関しては、多くはないが保実Ⅱで0.9%、幼実で3.5%あり、両者の違いがみられる。また、一般に保育所保育では養護内容が強調されるが、保実Ⅱでは養護面の実習体験(昼食、おやつ、午睡、排泄)は全体の9.1%に留まっていることも指摘できよう。これは養護面の保育が中心となる3歳未満児保育では複数担当が多く、実習生が担当する機会が少ないためであろうと推測される。また、いわゆる遊び以外の活動についてみると、保実Ⅱでは13.8%、幼実では27.3%となり、幼実において生活や養護面の実習機会が多いことが窺える。

実習形態と日数、実習内容のみで、多くを判断するには危険を伴うと思われるが、以上の結果より、個々の学生によって実習体験に違いがあり、実習経験密度に予想以上のバラツキがあることが明らかになった。このことより、以下のことが指摘できる。1つに、実習園と養成校との相互理解の増進が課題として挙げられる。このことは、1997年の教育職員養成審議会の第一次答申にも必要性が指摘されていることでもある。各実習園では事情が異なり、実習状況も多様であるが、養成校は本稿で取り上げた実習形態、実習内容等、様々な情報を提示しつつ、両者で実習指導の改善に向けて議論を深めていくべきである。すなわち、養成校によるアカウンタビリティの必要性が求められよう。

2つに、実習園における実習状況を踏まえた事前・事後指導のあり方の検討が重要である。例えば、責任実習体験の多寡に関わらず、学生が実習による自己成長を主張する場合が多いため、面談の際、具体的な実習状況について言及しないままになりやすい。今後の課題として、事前・事後指導に実習園における実習諸状況についての情報を活用することが挙げられよう。

【文献】廣瀬他 1998 日本保育学会第51回大会研究論文集 664-665: 廣瀬他 2000 日本保育学会第53回大会研究論文集 602-603: 三木他 2000 日本保育学会第53回大会研究論文集 604-605: 坂根他 2001 日本保育学会第54回大会研究論文集: 戸江他 2002 日本保育学会第55回大会研究論文集

表1 保育所実習Ⅱにおける実習状況 (表中の数値は人数を表す)

	実 習 形 態 (N=141)			
	全日+半日	部分	参加	観察
実	0日 20	1	12	134
1日	26 (全1:18 半1:8)	7	9	2
2日	46 (全2:17 全1半1:23 半2:6)	14	15	0
習	3日 18 (全3: 8 全2半1: 3 全1半2:7)	20	20	2
4日	13	21	19	2
日	5日 10	19	16	0
6日	2	22	17	1
数	7日 5	15	14	0
8日	0	10	8	0
9日	1	8	8	0
10日以上	0	4	3	0
平均日数	2.3	5.0	4.4	

表2 幼稚園実習における実習状況 (表中の数値は人数を表す)

	実 習 形 態 (N=138)			
	全日+半日	部分	参加	観察
実	0日 29	2	15	93
1日	42 (全1:37 半1:5)	4	12	9
2日	27 (全2:13 全1半1:12 半2:2)	7	14	7
習	3日 11 (全3: 8 全2半1: 1 全1半2:2)	11	10	7
4日	11	17	13	4
日	5日 14	18	11	4
6日	3	22	8	7
数	7日 1	17	11	5
8日	0	15	7	0
9日	0	13	14	2
10日以上	0	14	25	2
平均日数	1.9	6.1	5.4	

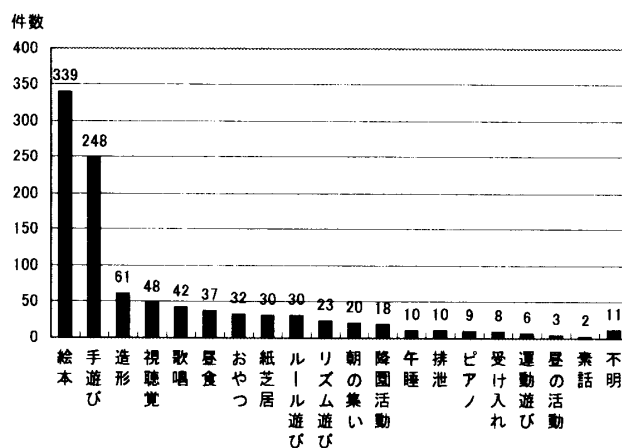


図1 保実Ⅱにおける部分実習内容別の体験件数

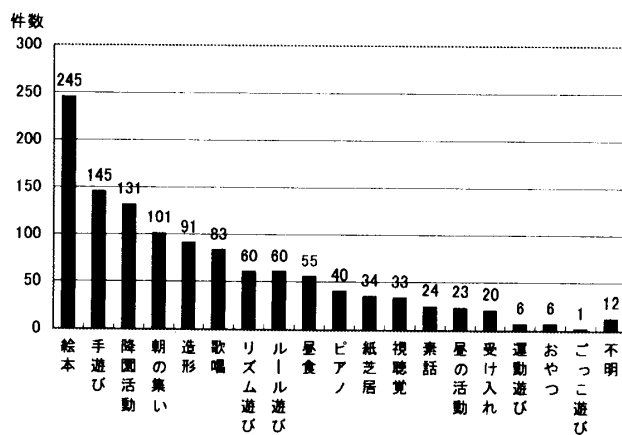


図2 幼実における部分実習内容別の体験件数